

社会福祉施設訪問法話 「源信僧都とその母君の逸話」

源信僧都が臨終の母君の枕辺に駆けつけて「お念仏はお称え申されましたか」とお訊ねになると、母君は「心では申そうと思うのですが、気力がない上に、勤める人がないので」とおっしゃるので、僧都はあれこれ尊いことなどをお聞かせになりながら、お念仏をお勧めになったのであります。すると、母君は、心をこめて道心を起こして念仏を一二百遍程称えているうちに、夜明け前の時分になって消え入るように亡くなったのであります。
(Ref『今昔物語集』「源信僧都の母(巻 15-39)」桑原博史監修三省堂刊「新明解古典シリーズ 7」)

一、聖人になられたあなた(源信僧都)の姿を見届けて安心して死にたい

「今は、昔」で始まる今昔物語巻の 15-39 には、浄土真宗の七高僧のお一人、横川(よかわ)の「源信僧都(西暦 942～1017)」の母君との親子の逸話が残されています。

僧都は、大和の国、葛の下郡(奈良県北葛城郡)のご出身であります。幼くして、天童の誉れ高く、比叡に上って良源(慈敬大師)に師事して学問に打ち込み、やんごとなき学僧にお成り遊ばしましたので、三条の大后の宮(おおきさきのみや = 朱雀天皇の第一皇女、昌子内親王)の御八講(法華八講のこと)に召されたそうであります。

四日間の御八講(みはっこう)が終って宮家から頂戴した献上物を大和国の母の許に「このように大后の宮様の御八講に参ってお布施の品を戴きました。初めて戴いたもので、まずは母上に御覧に入れるのです」と云ってお送りになったのであります。

僧都の母君が返礼のお手紙でおっしゃったことには、
「このように立派な学僧にお成り遊ばしたことは、私にとって嬉しいことですが、あなたを法師にした私の本意ではありません。華やかに召しに承えて出講遊ばしたことをあなたは立派なことだと思っておられるのでしょうか、この老母の心には反しています。
老母(私)には女の子は沢山いるけれども、男の子はそなた一人です。その大事なそなたを元服もさせないで、比叡山に上らせたのだから、学問をしっかりと身に付けて多武峰の聖人(一)のように尊くなって老母の後世をも救って戴きたい」(二)というのが私の老母の本当の心の裡だったのです。それなのにこうして華やかにあちこち出向かれるようなことは、私の本意に違うことです。『私も年をとりました。生きている間に聖人になられたあなたの姿を見届けて安心して死にたい』と思うているのです」と。

一(註) 増賀(ぞうが)聖人(西暦 917～1003)のことをいう。増賀は源信と同じく比叡山で良源に指示した天台宗の僧侶(源信より 25 歳年長)であります。名声を嫌い狂気を装っ

て比叡山を出、963年大和の多武峯(とうのみね)に入り、約四十年間住した。後世、遁世者の理想像と慕われる。「聖人」とは、求道に生き、仏法を体現する存在で、高德、清浄の僧侶、修行者に対する尊称である(Ref P5)。

二(註) 源信僧都の老母(母君)のお言葉はすごいですねえ、「老母が今生の命終って誕生する後生で、もし六道輪廻の迷いの境界に生まれた場合には、その後生の私をお救い下さい」とおっしゃっているのですから、今生の命終われば、次の生(後生)があるか否かさえ、不確かで、それ故、希望も生きがいもなく、ただ死を待つだけと云って老境を無為に過ごしかねない現代人にとっては、ただただ衝撃的なお言葉だというべきではないでしょうか。 今生の命終われば、私達はただ消え去っていくのではありません。後生があり、加えて、阿弥陀如来の本願力にお任せすれば、その後生として浄土が恵まれてあることは、衆生(私)にとり、何にもまして勇気づけられることではないでしょうか。

僧都は、この手紙を開いて見るにつけても涙を流し、すぐさま返事を書き送っておっしゃったことには、

「源信は、決して有名な僧になろうとの心はなく、ただ、母君が生きていらっしゃる時に、このような高貴な宮様の御八講等に参ったことをお聞かせしたいと思う気持ちが深くて急いで申し上げたのでした。ところが、母上がこのようにおっしゃったので、私は本当に心からしみじみと感じ入って、嬉しく思うことであります。しかれば、母上のお言いつけに従って比叡の山籠りを始めてきっと聖人になりたいと思います。母上が『今は会おう』とおっしゃるまでは決して山を出は致しません。それにしても母上は、なんという善人でいらっしゃることよ」と書き送られたというのであります。

そのご返事に母君がおっしゃったことには

「これでやっと安堵して冥土への道行も安心に思われます。返す返す嬉しく思い申し上げます。比叡のお山では決していい加減にお過ごしになってはいけません」と。

僧都はこれを御覧になり、この度の二度に亘る母上からの返事を法文の中に巻き置いて、時々取りだして見ては涙されたのであります。

僧都が、このように山にお籠りになって六年が過ぎ去りました。

七年という年の春、母の許に手紙を書き送っておっしゃったことには、

「六年は既に山籠りで過ぎてしまいましたが、長い間お目に掛けていませんので母上は恋しくお思いでしょうか。それならば私的に母上のみ許にも参りましょう。」と。

これに対して母君をご返事でおっしゃった事には、

「本当に恋しく思い申しますが、お目に掛ったとして、それによって、私自身の人生で煩惱成

就の凡夫故に犯した罪業が消えは致しません。やはり、何といたってもあなたが山籠りをして励んでいらっしゃるという風の便りを聞くことだけが嬉しいのです。ですので、こちらからおいで下さいと申さない限りは決して山をお出になっははいけません」と。

僧都はこれを御覧になって、この尼君はわが母上ではあるけれどもとても並みの人ではないなあ。世間一般の母というものは、果たしてわが子にこんな風に言うだろうかと思って過ごしているうちに九年の月日が過ぎ去ったということでありました。

二、母君の臨終の枕辺に馳せ参じて

さて、母君からは「私から知らせるまでは来てはなりません」と云ってよこしたけれども、気掛かりにもの寂しく思って、母君のことが急に恋しく思われたので、「**もしや、母君がお亡くなりになる時が近づいたか、それとも、私が死ぬに違いない時であろうか**」と心にしみじみと思われたので、「ええいままよ、かまうものか。『母君は来てはなりません』とおっしゃったけれども、出かけて参りましょう」と思って出かけて行かれたのでありました。

僧都の一行が、大和の国に入られたところが、道中でばったり一人の男が手紙を持って来るのに出くわされたというのです。

僧都が、「どこへ行くお人か」とお訊ねになると、男が応えて云う事には「これこれの尼君が、横川にいらっしゃるお子さんのお坊様のところへやる手紙を持って行くのです」と応えるので、「そのように云うのは私のことだ」と云って、その手紙をお受け取りになり、馬に乗りながら行く途上で手紙を開いてみると、いつもの母君の筆跡ではなくて、まるで見苦しく筆が乱れて書かれてあるではありませんか。

僧都は胸が塞がって、何事がおこったのであろうかと思って読んで御覧になると「このところ何ということもなく風をひいたのかと思うて居たところ、年のせいでもあろうか。この二、三日は弱々しくて気力もなく思われます。これまでは『私の方から申すまでは山からお出になっははいけません』と気丈に申し上げておりましたが、最早、最期の時ともなると、もう一度あなたにお目に掛らないで死んでしまうのだろうか」と心細く、この上なく恋しく思われますので、このように手紙で申すのです。早く早くおいで下さい」としたためてあるではありませんか。

僧都がこれを御覧になって、「さては、近頃、妙に胸騒ぎが続いていたのはこういうことがあったのか。世に親子の契りは心にしみるような情のあることとはいうものの、私を仏道に強く勧め入れなされた母なので、このように思われたのだった」と思い続けるうちに、涙が雨のように落ちたということでありました。

僧都は、弟子の学僧たちを二三人程連れていらっしたのが、それらにも「こういうことがあったのだなあ」と云って、馬を早めて行かれたところ、日暮れ時に母の許に行き着かれたのであります。急いで歩みを運び母の許に寄って見ると、母君はひどく弱っていらっして、不安な状態におなり遊ばしであります。

僧都が「こうしてやって参りましたよ」と大声でおっしゃると、尼君(母君)は、「どうしてこんなに早くいらっしたのですか。今朝、夜明け前に貴方のところへ人を差し向けたばかりだったのに」と驚かれたのであります。

僧都がおっしゃった事には、「母上がこのような状態であらうからであろうか、このごろ、母上のことが恋しくて仕方がありませんでしたので、やって参りましたところが、途中で母上のお使いとばったり出会ったのです」と。

母君はこれをお聞きになって、「ああなんと嬉しいことよ。死ぬ時には、今一度あなたにお目にかかれないものかしらと云いもし、思うてもおりましたが、こうして目の当たりあなたが会いにいらっした姿を見るにつけ、親子の契りの深さがしみじみと感ぜられることですよね」と、弱弱しい息づかいの中からお応えになりました。

源信僧都が「**お念仏はお称え申されましたか**」とお訊ねになると、母君は「心では申そうと思うのですが、気力がない上に、勧める人がないので」とおっしゃるので、僧都はあれこれ尊いことなどをお聞かせになりながら、**お念仏をお勧めになった**のであります。

すると、**母君は、心をこめて道心を起こして念仏を一二百遍程称えているうちに、夜明け前の時分になって消え入るように亡くなった**のであります。

僧都がおっしゃったことには「私が来なかったらば、尼君の臨終はこうではなかつたらう。私は、親子の縁が深く、こうしてやって来て会って念仏を勧めそれによって母君が道心を起こして念仏を称えてお亡くなりになったのだから、浄土往生は疑いがない。まして、私を聖の道に勧め入れなされた尊いお志によって、このように最期はかくも尊くお亡くなりなされたのだ。そうだとすれば、親は子のため、子は親のために、この上ない仏道への機縁となることだなあ」といって、僧都は涙を流して横川にお帰りになったのであります。

横川の聖人たちもこれを聞いて、しみじみと心にしみる親子の縁であると言って、涙を流しつつ尊んだ、と爾来、語り継がれて来たのであります。

(Ref 『今昔物語集』「源信僧都の母(巻十五 三九)」桑原博史監修三省堂刊「新明解古典シリーズ7」P2～20)合掌

(後書き)

この一文は、古典シリーズを元にして読み易く書き改めたものであります。原文は、どこ

で終わるともしれない長文で随分読みにくいところがあります。私は原文は果たして悪文ではないかとさえ訝られるところです。よって、適宜単文化し、主語を明示し、口調を整えて、表現し直しておりますので全くの現代語訳というわけではありません。

最後に、源信僧都が母君にお念仏をお勧めになったお心を、親鸞聖人のみ教えを頂戴する立場から聞いてみるとどのようになるでしょうか。

平成二十二年一月十九日の福祉施設法話(藤波園、清風荘)では、私は次のようにご案内させて戴いたことであります。

「それでは、折角のこの機会ですから、源信僧都に倣って、お念仏をお称え申しましょう。皆さん、両の手を合わせて両三度、お念仏をお称えなさいませよ。よろしゅうございますか。『なんまんだ一ぶ、なんまんだ一ぶ、なんまんだ一ぶ』。

ただ今、南無阿弥陀仏と称えさせて戴きました。

すると聞こえて下さったものがある筈です。

皆さん、何とお聞きとどめになったでしょうか。

南無阿弥陀仏と称えれば、南無阿弥陀仏と聞こえて下さったのです。

私が称えるのも実は、阿弥陀如来のご本願に促されて称えているのでありましたし、称えたのは確かに私でも、わが口を飛び出した途端に私のものではなく、南無阿弥陀仏は、阿弥陀如来直々のお喚び声となって私の胸に直接呼びかけ給うたのであります。

なぜなら、阿弥陀如来は、たかだか百年の命の私達と異なって、無量寿如来であり、命に限りがない仏様として、ただ今も働きづめに働いていてくださるのですから。

またそのお心は、「ワレヲタノメ、ワレニマカセヨ」でありました。

それゆえ、聞こえて下さった南無阿弥陀仏に聞き入るとき、如来様の真実(まこと)のお心(その本質はお名号)がわが胸底に飛び込んで下さるのであり、かくしてわが胸底にお宿り下さったお名号が私をお浄土につれて行って下さるのですもの。

それでは、ここで、皆様方と一緒に「涙君さよなら / 涙君なつかし」を歌うことに致しましょう。……(中略)……。はい、有難うございました。本日はこれにてお終いでございます。最後にご尊前に向って、お念仏申し上げてお別れすることに致しましょう。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、……、合掌

正覚寺仏教壮年会例会	毎月第一日曜日	午後八時より
正覚寺仏教婦人会例会	毎月十六日	午後七時半より
著作編集兼発行元 りびんぐらいぶず編集室(浄土真宗本願寺派 正覚寺内)		
〒520-0501 大津市北小松四五二番地 ☎&Fax077-596-0166 住職 堅田 玄宥		
http://syohgakuji.web.fc2.com/ E-Mail:mhkatata@pluto.dti.ne.jp		